

人間万事塞翁が馬

山本 淳子

人生における幸不幸は予測しがたいものです。幸せが不幸に、不幸が幸せに、いつ転じるかはわかりません。私が初めて、予期せぬ出来事に打ちのめされたのは、7 歳の時でした。

当時、女の子たちに人気があり、仲のよい友達も持っていた「リカちゃん人形」が、私はほしくてたまりませんでした。だから父が「7 歳の誕生日に買ってあげるよ」と言ってくれた時のうれしさは、今でも覚えています。

誕生日、父とデパートへ行くと、私はお目当てのおもちゃ売り場に走って行き、さっそくリカちゃんを手に取りました。しかし父はそれをじっと見た後、なぜかほかの人形をチェックし始めました。どうやら値札を見比べていたようです。そして父は、別の人形を手に取り、思いがけないことを言いました。

「このタミーちゃん、どう？アメリカ人の女の子だって。かっこいいね。これにしよう」今思えば、リカちゃんより安かったのでしょう。まだ反抗期を迎えていなかった私は、がっかりした気持ちを抑え、無理やり笑顔を作って、「うん……ありがとう」と言いました。家に帰ってからも、リカちゃんとは似ても似つかぬタミーちゃんの顔を見るたび、ため息をついたものです。

ところがある日、友達が家に遊びに来た時のことです。私はタミーちゃんをみんなに紹介しました。案の定、誰も見たことのない人形でした。すると、一人の女の子が思いがけないことを言ったのです。「私のリカちゃんと友達になれそうね」

その一言で、私は気づきました。リカちゃんは何人いても、みんなリカちゃんです。友達と一緒に遊ぶなら、違う個性を持った人形がいた方が、ずっと楽しいのです。そう思って改めて見ると、タミーちゃんは、少し気取った独特の表情をしていて、ブロンドの髪と青い瞳も魅力的でした。いつの間にか私は彼女が大好きになり、タミーちゃんは私の子ども時代を通しての親友になりました。大人になってからも、私たちの人生には、そんな「タミーちゃんの瞬間」があるのではないのでしょうか。

歳月は流れ、高校生になり、大学進学を考える時期になりました。私は自分の将来像を描き始めました。本当にやりたいことは、まだよくわかりませんでした。でも、歌ったり踊ったりすることが好きだった私は、漠然と「芸術学部が向いているのではないか」と思うようになりました。

楽器の演奏はできない。絵も描けない。それなら写真学科に入れば、映像やメディアに関係する仕事に就けるのではないか。これが自分なりに考え抜いて出した答えでした。しかし、芸術学部の写真学科という選択は、またもや親に反対されました。がっかりしましたが、結局、第二志望だった英文学科に進むことになりました。もし写真学科に進んでいたら、華やかに見えた映像の世界は、想像以上に陰しかったかもしれません。あるいは、その世界で生き生きと活躍していたかもしれません。それは今となっては、誰にもわかりません。でも、後悔はありません。第二志望だった大学で英語教育の面白さに目覚め、その道を歩み続けた先に、今の私がいるからです。

人生には、時に予期せぬ出来事が起こります。その時には「どうしてこんなことになったのだろう」と、がっかりすることもあるでしょう。でも、それが幸運なのか不運なのかは、その瞬間にはまだわからないのかもしれません。だからこそ、若い人たちには、予期せぬ出来事を受け止めながら、それをどう生かせるかを模索してほしいと思います。思いもよらぬ人と出会い、新しいことに挑戦することで、それまで想像もしなかった世界や、自分自身の新しい可能性に気づくこともあるでしょう。欲しかったリカちゃんの代わりにやってきたタミーちゃんが、いつしか大切な存在になったように。

最初はやっとした失望に思えたことが、振り返ってみれば、人生で最高の出来事の一つになっている。人生とは、案外そんなものなのかもしれません。

(やまもと・じゅんこ 教授)
